

クラウド型デジタル導入へ



神戸ヤマト運輸

業務管理との連動視野 更なる安全性向上めざす

[兵庫] 神戸ヤマト運輸（野田実社長、神戸市兵庫区）はクラウド型デジタルタコグラフの試験導入を8月から始め、安全性の更なる向上を目指していく。将来的には業務管理システムとの連動を視野に入れ、一層の業務効率化を図っていく考えだ。

（水野 正博）

能、既存の業務管理システムに走行データや業務データを取り込めるなどをポイントに機種を選定。2010年から採用しているタイガー（竹添幸男社長、東京都千代田区）の総合管理システム「トラックメイト

これまでの取り組みとして、月例の安全会議を開き、7、8人の小集団活動を推進。タコグラフのチャート紙から得られるデータを基に安全運転指導もを行い、特に速度管理には力を入れてきた。

安全に対する社会的 requirement が高まる中、タコグラフに代わってデジタル導入を検討。しかし、メーカーによって機能や点数評価基準の異なる点がネックとなつて、クラウド型デジタルを4~5年で4台以上の全車両に装着

Pro2」と連動して運用できる」とから、富士通製クラウド型デジタルタコグラフ「DTS-C1D」の採用を決めた。当初は、クラウド型デジタルを2両に取り付け活用方法を検討。その後は主に車両の代替時期に合わせて順次導入を進め、4~5年で4台車以上の全車両70両に装着する予定だ。

導入台数がある程度増えた段階で、デジタルの点数統一した機種のため、同じ判断基準で具体的な指導ができるのではないか」（野田社長）と期待を寄せる。ことし会社設立から60周年を迎えた。野田氏は「長年、事業を継続できたのは、安心と信頼の証し。それらを更に積み重ねていくための一つのツールとして、デジタルなどの機器を使つていきたい」と強調する。